「ほっとやまはく」タイム㊸

企画展 手鑑「多々良の麻佐古」

中世大名大内氏文書の粋①

県立山口博物館では、企画展・手鑑（てかがみ）「多々良の麻佐古（まさご）」を開催中です（会期は来年2月4日まで）。

この館蔵品の手鑑は、大内弘世（14世紀中頃）から大内義長（16世紀中頃）に至る大内氏歴代の文書24点の他、関係寺院、家臣の発給文書、和歌など計55点を収録した文書集で、県の有形文化財に指定されています。

編者は、元長州藩士で、明治期に宮内省の要職を歴任し、能書家としても知られる杉孫七郎（すぎ・まごしちろう、1835～1920年）で、かつての主家である大内氏の書跡を集め、文書集に仕立てたものです。ちなみに、標題の「多々良」は大内氏の本姓であり、大内氏ゆかりの書跡を真砂（まさご、細かい砂）に例えたものです。

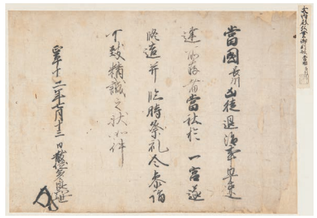
手鑑の表紙

この手鑑の特長は、①大内弘世から義長に至る大内氏歴代当主の文書が通覧できる②書下（かきくだし）、安堵状（あんどじょう）、下文（くだしぶみ）、連署状などさまざまな書式の文書が含まれ、中世武家文書の様式を学べる③美術工芸品としての魅力を堪能できる―という点です。今回から2回にわたり、本展の主な出品資料を紹介してみたいと思います。

大内弘世書下

▼「大内弘世書下」1357（正平12）年7月13日

大内弘世が、長門国の「凶徒」を退治するという望みを果たしたならば、長門国一宮（下関市・住吉神社）を修理して臨時の祭礼を行い、自ら参詣することを誓ったものです。この当時、大内弘世は南朝方の周防国守護として隣国長門へ侵攻中で、ここでいう凶徒とは、北朝方の長門国守護であった厚東氏を指します。後年、弘世は厚東氏を長門国から追うと、約束通り同宮を再建しました。現在、国宝に指定されている住吉神社本殿は、この時に建てられたものです。

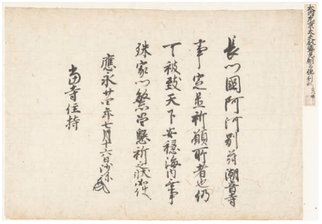


大内盛見書下

▼「大内盛見書下」1417（応永24）年7月16日

大内盛見が、長門国阿川別府（あがわのべふ、下関市豊北町）にあった潮音寺を祈願所とし、天下安穏や家門繁昌の祈とうをするよう命じたものです。盛見は、室町幕府にその立場を認められ、長期間在京して幕府を支えました。この文書が出された当時は出家していたため、文書中では「沙弥」（しゃみ、修行僧）を名乗っています。ちなみに、山口市の国宝瑠璃光寺五重塔は、応永の乱で戦死した兄義弘の菩提（ぼだい）を弔うために盛見が建立したものです。

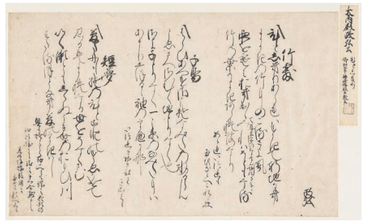
※「盛見」の読み方には諸説あります。



大内政弘和歌懐紙詠草

▼「大内政弘和歌懐紙詠草」

大内政弘が、三種の題で2首ずつ詠んだ和歌を、指導を仰いだ公卿の三条公敦（きんあつ）に批評してもらったものです。大内政弘は、応仁・文明の乱で西軍の主力として活躍した武将として知られますが、その一方で、歌道に励み、「拾塵和歌集」（しゅうじんわかしゅう）を編んだほか、連歌師・宗祇（そうぎ）の「新撰菟玖波集」（しんせんつくばしゅう）の成立にも大きく貢献しました。これらの和歌は、歌人としての政弘の姿を伝える好例です。



本展について詳しく知りたい方は、山口博物館ホームページをご覧ください。展覧会の解説書や出品目録も無料でダウンロードできます。

山田稔（主任、歴史担当学芸員）

▽次回は20日です。

宗祇坐像（県立山口博物館所蔵）

山口県立山口博物館
TEL　083－922－0294
月曜休館（祝日の場合は翌日）。最新情報はホームページで。